

I. 導入

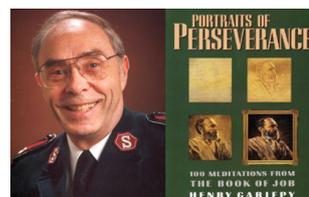
イースターおめでとうございます。今朝お越しくござりありがとうございます。たった今、賛美チームや日曜学校、またクワイヤによるすばらしい賛美をお聞きしましたが、どれも同じテーマをこだましています。それは、イエス・キリストの復活についてであり、イエスを信じるすべての人に神が与えてくださる救いと喜び、愛と平安の祝福についてです。

先ほど聞いた賛美は、「主は生きておられる」というタイトルです。週報に歌詞が英語で印刷されていますが、コーラスの部分はこのような意味です。

主は生きておられる、キリスト・イエスは今日も生きておられる
人生の険しい道をとともに歩んで語ってくださる
主は生きておられる、救いを与えるために
どうしてわかるのかと聞かれたなら、答えよう
それは、私の心に生きておられるから

これはただの歌ではありません。イエスの復活とイエスの臨在の喜び、信仰の証、さらにイエスを求めるすべての人たちへの励ましを高らかに宣言しているのです。これこそイースターの本質です。宣言であり、祝いであり、証であり、励ましです。今日、主がこれらすべてのもので皆さんを祝福してくださいように

世界中の数えきれない人々が、イエスと出会い、イエスを信じる祝福に与ってきました。今朝はそのひとり、ヘンリー・ギャリーピーという男性についてお話したいと思います。おそらくその名前を聞いたことのない人がほとんどだと思いますが、彼は慈しみ深い神と隣人とに人生を捧げた男性です。ヘンリー氏は、救世軍というキリスト教団で奉仕



していました。救世軍は、軍隊流の用語を使用するという独特のスタイルを持った教団で、この世の善のために悪と戦うことに重点を置いています。救世軍士官であったヘンリー氏は、人生をかけて貧困者救済とイエスの真理のために戦いました。ヘンリー・ギャリーピー小隊長は、1930年に生まれ、2010年4月3日、「栄光へと昇級」しました。ヘンリー氏は亡くなった次の日、天国でイエスとともにイースターを祝ったのです。

ヘンリー氏は、イエスについて、またクリスチャンとして生きることについて、多くの著書を残しています。そのひとつが、「Portraits of Perseverance」（忍耐のすがた）です。その中で、ヘンリー氏は裕福な男カールと貧しい老人ハンスについて記しています。

カールは丘一帯の所有者だった。彼はよく、馬に乗って丘を巡り、所有地や使用人の様子を見ていた。ある日、カールはいつものように馬を走らせていた。丘を見渡し、自らの財と出世を誇らしく思っ



た。丘を越えると、ひとりの小作人ハンスがいた。年老いたハンスは、昼食を取ろうと一休みしているところだった。

カールの目に入ったのは、頭を垂れ、神に食前の感謝をささげるハンスの姿だった。昼食と言っても、パン一枚とチーズ一切れだけである。カールはげんそうに言った。「たったそれだけの食べ物に、私なら感謝などささげまい。」「これで十分です。神から給わったものですから、感謝しております」とハンスは応えた。老人の返答にとまどったカールは、馬の向きを変え、その場を去ろうとした。ハンスは続けた。「お待ちください。お伝えしたいことがあるのです。昨日私は夢を見ました。夢の中でなんと美しい場所に声が聞こえるのです。『今夜、丘で一番豊かな者が死ぬ』と。」

カールは取り合わなかった。けれども、時間が経つにつれ、「今夜、丘で一番豊かな者が死ぬ」と言ったハンスのことばが気がかりになった。カールは医者と呼ばれ、体を入念に調べさせた。医者は何も悪いところはないと言ったが、カールは不安でしょうがない。その夜カールは一睡もできなかった。朝が来て、まもなく使いの者から知らせが届いた。「カール様、ハンスじいさんが昨夜亡くなったそうです。」

丘で一番豊かな者とは誰だったのでしょうか。カールには土地や財産があり、贅沢な暮らしをしていました。一方、ハンス老人には何もありません。食べ物も十分でないほどでした。けれども、ハンスには神との平和と感謝の心がありました。この世は、富と名声を求めよと呼びかける声に満ちています。見栄やプライドが私たちにそうさせることもあります。しかし、イエスは弟子たちにこうおっしゃいました。(マタイ6:19-21)「6:19 「あなたがたは地上に富を積んではならない。そこでは、虫が食ったり、さび付いたりするし、また、盗人が忍び込んで盗み出したりする。6:20 富は、天に積みなさい。そこでは、虫が食うことも、さび付くこともなく、また、盗人が忍び込むことも盗み出すこともない。6:21 あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ。」カールには地上の富があり、ハンスには天に積まれた富があったのです。

今朝、私たちの富はどこにありますか。本当の富、すなわち平安と喜びの人生や天に積まれた富を得る術を知りたいですか。真の富はイエスを信じる信仰によって受け取れます。コリント第一15:1-8を読みましょう。この個所で、パウロはコリントの教会に向けて、イエス・キリストの福音の良き知らせについて記しています。

II. 聖書朗読(コリント第一15:1-8, 新共同訳)

15:1 兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。これは、あなたがたが受け入れ、生活のよりどころとしている福音にほかなりません。
15:2 どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。15:3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、15:4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、
15:5 ケファに現れ、その後十二人に現れたことです。15:6 次いで、五百人以上もの兄弟たちに同時に現れました。そのうちの何人かは既に眠りについたらしく、大部分は今なお生き残っています。15:7 次いで、ヤコブに現れ、その後すべての使徒に現れ、15:8 そして最後に、月足らずで生まれたようなわたしにも現れました。

III. 教え

この個所でパウロはこう言います。(コリント第一15:2)「どんな言葉でわたしが福音を告げ知らせたか、しっかり覚えていれば、あなたがたはこの福音によって救われます。さもないと、あなたがたが信じたこと自体が、無駄になってしまうでしょう。」(絵画：1620年レンブラント作)ここで問題となっているのは救いです。使徒パウロはこれ以前に、コリントの町を訪れ、人々にイエスの良き知らせである福音を告げ知らせました。そしてコリントの教会にしたためたこの手紙では、自分が告げたことの要点を再び強調しています。



パウロは続けます。(コリント第一15:3-4)「15:3 最も大切なこととしてわたしがあなたがたに伝えたのは、わたしも受けたものです。すなわち、キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、15:4 葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと、」パウロが告げ知らせたのは、自分で作った話ではなく、彼自身聞いて受け取った話です。パウロは忠実な伝達者として、救いの知らせを伝えていました。キリストという言葉はメシアと呼ばれる救い主を指しています。このメシアの来臨は、何百年も前から預言者たちによって約束されてきました。イエス生誕のずっと前から、メシアについて詳しく預言されていました。パウロがここで強調しているのは、キリスト・イエスの死と復活が預言通り、つまり、聖書に書いてあるとおりに成就したという点です。

「キリストがわたしたちの罪のために死んだ」この一節に現わされているのは、私たちがみな神の目に間違っただけをしたかということではなく、私たちがみな罪人だということなのです。私たちがみな罪人で、その罪が真の父と私たちを隔てているのです。真の父とは、私たちに命を与える創造主なる神です。しかし、イエスが罪のない完全な人として生き、私たちの罪の代価を払ういけにえとしてご自身をささげてくださいました。イエスは私たちの身代わりに死なれました。死の判決を背負い、私たちが神と和解して永遠の命を受けられるようにしてくださったのです。



「葬られた」ローマの兵士によってイエスの死が確認された後、イエスの遺体は十字架から降ろされ、埋葬用の亜麻布にくるまれて岩に掘った墓に葬られました。入口は大きな石でふさがれ、ローマ帝国の印章によって封印されました。誰も近寄れないようそこには番兵が置かれました。イエスは死んで葬られ、遺体を盗まれないようにと警戒体制が敷かれました。



「三日目に復活した」これが、イースターで祝われる復活です。私たちの主イエスは、死んで葬られ、三日目に死からよみがえられました。これこそ、聖書の約束が確かな真実であることの証明です。私たちは生ける主を信じ、従っています。イエスは生きておられます。先ほど読んだ箇所、500人以上の人が復活後のイエスの姿を目撃したとパウロは記

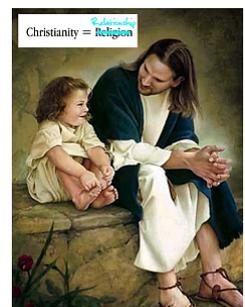


しています。また、その目撃者の「大部分は今なお生きています」とも書いています。この短い一節が非常に重要です。パウロがコリントの信徒への手紙を書いたのは、イエスの死と復活の約23年後です。その手紙の中で、500人の目撃者の大部分が当時まだ生きていたと断言しています。つまり、自分の言うことが信じられないなら、イエスの生きた姿を見た目撃証言してくれる人が何百人もいると、手紙の読み手に言っているわけです。

イエス・キリストの復活の事実を確証づける証拠はいくつもあります。まず、パウロがここで記したように、イエスの復活後、イエスの姿を見たという何百人もの目撃者がいることです。その多くは、名前も書き残した文書も知られています。福音書、およびペテロやパウロの書簡などです。これらの証言は信ぴょう性があります。さらに、空っぽの墓が証です。イエスの遺体はどこからもみつきりませんでした。イエスが再び生き返ったからです。墓は嚴重に警備されていましたが、遺体が盗まれることはありません。聖書には、遺体はなくなっていたが、亜麻布は残されていたと記されています。遺体を盗む前に埋葬用の亜麻布を剥ぎ取るというのはあまりにも不自然です。復活を受け入れない限り、亜麻布が残されていた点に説明が付きません。成就した預言の数々も説得力のある証拠です。預言者はメシアが死からよみがえると言い、そのとおりになりました。また、無数の人々が時代を越えて今も生ける主イエスとの一対一のつながりを経験しています。先ほどの賛美にあるとおり「ともに歩んで語ってください」お方です。私は救い主が生きておられると確信しています。

しかし、人間の能力では死人がよみがえることは不可能です。聖書は、神がイエスを死からよみがえらせたと言います。創造主なる神は、天地を造り、私たちすべてに命を与えるお方ですから、復活も不可能ではありません。聖書はこれ以外に、とても大切なことを語ります。:コリント第二5: 17-19「5:17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。5:18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。5:19 つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。」

キリスト・イエスのうちに神がおられました。すなわち、イエス・キリストの本性は神だということになります。神ご自身がイエス・キリストという人の姿をとってこの世に来られました。ご自身がお造りになった人々に救いをもたらすためです。こういうわけで、イエスを信じるなら私たちは神と和解します。キリスト教は宗教ではなくつながりだとよく言われます。もちろん、宗教をいくつか挙げればキリスト教もそのひとつに数えられるでしょう。しかし、この表現は、非常に重要なことを物語っています。キリスト教信仰の中心は、イエス・キリストとのつながりだということです。クリスチャンはイエスを信じます。そして、語りかけ、ともに歩みます。イエスなしにキリスト教はあり得ません。



復活が重要なのはこういうわけです。死人とつながりを持つことはできません。けれども、イエスは死んではいないのです。イエスは生きておられます。ヨハネ20章には、疑い深いトマ

スが復活を信じる者とされたいきさつが記されています。イエスはすでに他の弟子たちに現れていらっしやいましたが、トマスはその日、何か別の用事でそこにいなかったのでしょうか。その一週間後のできごとはこうです。

ヨハネ20:24-28 「20:24 十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。20:25 そこで、ほかの弟子たちが、『わたしたちは主を見た』と言うと、トマスは言った。『あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。』20:26 さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。20:27 それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』20:28 トマスは答えて、『わたしの主、わたしの神よ』と言った。」トマスは、ゆっくりとでしたがやっとこのことを理解しました。イエスは生きておられるのです。イエスが主であり神なのです。そして、ご自身の民に救いをもたらすために来られたお方なのです。トマスは、「わたしの主、わたしの神よ」と言いました。これは第一人称です。イエスとの一対一のつながりをトマスは言葉にしたのです。

人生で直面する大切な問いの答えは、イエス・キリストとのつながりの中に見出せます。私たちはどこから来たのか。なぜ存在するのか。人生の意義とは何か。孤独にどう向き合えばよいのか。人は死んだらどうなるのか。今までの過ちはどうすれば赦されるのか。生きていく力をどこで得ればよいのか。そのような問いの答えはすべて、イエスのうちにあります。



神が私たちをお造りになったのは、私たちを愛するためです。私たちの生きる目的は神とともに歩むことです。イエスはいつもともにおられますから、私たちは決してひとりぼっちではありません。人は死ぬと、天国のイエスのもとに行きます。イエスが十字架で成し遂げられた御業を信じるなら、私たちの罪は赦されます。イエスとともに歩むと、イエスの御霊が私たちを力づけ、人生の悩み苦しみを乗り越えさせてくれます。

ローマ10:9-13で、イエスとの一対一のつながりをどのように始めればよいかについて、パウロはこう説明します。「10:9 口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。10:10 実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。10:11 聖書にも、『主を信じる者は、だれも失望することがない』と書いてあります。10:12 ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。10:13 『主の名を呼び求める者はだれでも救われる』のです。」

IV. 結び

「主の名を呼び求める者はだれでも救われる」この約束はすべての人に向けられたものです。あなたのためであり、私のためです。イエスの名を呼び求め、このお方を人生の主として迎えるなら、私たちの罪は赦され、永遠の命を無償でいただきます。永遠の命はただ長生きするということではありません。それは、満たされた人生、愛と喜び、希望と平安に満ちた人生です。これが復活の命です。イエスとつながって生きることです。今日の週報といっしょに、イエスと出会ったマグダラのマリアという女性の物語を描いた映画のDVDを皆さんにお渡ししています。どうぞお持ち帰りください。そして、イエスを知るとはどういうことかを彼女が知るようになった経緯をご覧ください。

この他、週報にはノエルさんによるアートのカードが二枚入っています。ひとつは死んだイエスの姿を、もうひとつは復活したイエスの姿を描いています。ここで、もうひとつノエルさんの絵画をご紹介します。これは、イエスが復活された後、マリアがイエスと出会う場面です。マリアが出会ったのは、イメージや崇高な教えではありません。生きるための規則でもありません。マリアが出会ったのは人です。これがクリスチャンの信じる信仰です。これは宗教ではありません。イエスとの直のつながりです。ここにいる一人ひとりが、そして家族や友人、隣人が、皆イエスと出会い、愛に満ちた絆にあずかれるようにと祈ります。



最後に、ルカ24:46-47をお読みしましょう。「24:46 言われた。「次のように書いてある。『メシアは苦しみを受け、三日目に死者の中から復活する。24:47 また、罪の赦しを得させる悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、」

祈りましょう。

V. 祈り